

## シルクロードを訪ねて? : 西域の詩

著者	奥村 郁三
雑誌名	史泉
巻	56
ページ	47-62
発行年	1981-11-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00026504">http://hdl.handle.net/10112/00026504</a>

# 西域の詩

シルクロードは漢代以来、長安・現・西安から西にのびることとなったが、今、一般によく知られた詩を『唐詩選』などから選んで、この長い道を西へとたどってみよう。

世界帝国唐の都の長安、ここは当時人口百万を数え、英華を誇っていた。都には歓楽の世界があるかと思えば一方では再会を期し難い別れがあり、さらにはまた人間の悲痛な叫びも聞える。

白居易の「長恨歌」は、玄宗と楊貴妃の悲劇的な恋をうたったのであるが、詩の華やかさは当時の長安の英華もまたうかがうことができる。長安をうたう詩として「長恨歌」を思い出すのもまた可であろう。(三個所、六十六句省略)

## 長恨歌

白居易

漢皇重色思傾国 漢皇 色を重んじて 傾国を思う  
御宇多年求不得 御宇 多年 求むれども得ず  
楊家有女初長成 楊家に女あり 初めて長成す

## 奥村郁三

(関西大学法学部教授)

養在深窓人未識	養れて深窓に在り 人 未だ識らず
天生麗質難自棄	天生の麗質は自ずから棄て難く
一朝選在君王側	一朝 選ばれて 君王の側に在り
迴眸一笑百媚生	眸を廻らして一たび笑えば百媚生じ
六宮粉黛無顏色	六宮の粉黛顔色無し
春寒賜浴華清池	春 寒くして 浴を賜う 華清の池
温泉水滑洗凝脂	温泉 水滑らかにして 凝脂に洗ぐ
侍兒扶起嬌無力	侍兒扶け起こすに 嬌として力無し
始是新承恩沢時	始めて是れ新たに恩沢を承くるの時
雲鬢花顏金步搖	雲鬢 花顏 金步搖
芙蓉帳暖度春宵	芙蓉の帳暖かにして春宵を度る
春宵苦短日高起	春宵短かきに苦しみ 日高くして起く
從此君王不早朝	此れ従り君王 早朝せず
承歡侍宴無閑暇	歡を承え 宴に侍りて閑暇無く
春從春遊夜專夜	春は春の遊びに従い夜は夜を専らにす

後宮佳麗三千人

三千寵愛在一身

金屋粧成嬌侍夜

玉樓宴罷醉和春

.....

麗宮高処入青雲

仙樂風飄処処聞

緩歌慢舞凝絲竹

盡日君王看不足

漁陽鑿鼓動地來

驚破霓裳羽衣曲

九重城闕煙塵生

千乘萬騎西南行

翠華搖搖行復止

西出都門百余里

六軍不發無奈何

宛轉蛾眉馬前死

花鈿委地無人收

翠翹金雀玉搔頭

君王掩面救不得

回看血淚相和流

.....

夕殿螢飛思悄然

後宮の佳麗 三千人

三千の寵愛 一身に在り

金屋 粧成つて 嬌として夜に侍り

玉樓 宴罷んで 酔うて春に和す

麗宮高き処 青雲に入り

仙樂 風に飄えりて処処に聞ゆ

緩歌 慢舞 絲竹を凝らし

盡日 君王 看れども足きず

漁陽の鑿鼓 地を動もして来り

驚破す 霓裳羽衣の曲

九重の城闕 煙塵生じ

千乘 万騎 西南に行く

翠華は揺揺として行いて復た止り

西のかた都門を出でてより 百余里

六軍発せず 奈何ともするなし

宛転たる蛾眉 馬前に死す

花鈿は地に委てられ 人の収むるなく

翠翹 金雀 玉搔頭

君王 面を掩いて救い得ず

回り見て血涙 相和りて流る

.....

夕殿に螢飛んで 思い悄然

孤燈挑尽未成眠

遲遲鐘鼓初長夜

耿耿星河欲曙天

鴛鴦瓦冷霜華重

翡翠衾寒誰与共

悠悠生死別經年

魂魄不曾來入夢

.....

臨別殷勤重寄詞

詞中有誓兩心知

七月七日長生殿

夜半無人私語時

在天願作比翼鳥

在地願為連理枝

天長地久有時盡

此恨綿綿無盡期

一方、下町では、異国風の酒場がある。

孤燈 挑げ尽して 未だ眠りを成さず

遲遅たる鐘鼓 初めて長き夜

耿耿たる星河 曙けんと欲するの天

鴛鴦の瓦は冷かにして霜華重く

翡翠の衾は寒くして誰と共にせん

悠悠たる生死 別れて年を経たり

魂魄 曾て来りて夢に入らず

別れに臨んで 殷勤に重ねて詞を寄す

詞中に誓あり 両心のみ知る

七月七日 長生殿

夜半 人無く 私語の時

天に在りては願わくば比翼の鳥と作り

地に在りては願わくば連理の枝と為らん

天長地久 時有りて尽きんも

此の恨は綿綿として尽くる期無し

前有樽酒行

琴奏竜門之緑桐

玉壺美酒清若空

催絃扞柱与君飲

其二

琴は竜門の緑桐を奏し

玉壺美酒 清くして空しきが若し

絃を催がし柱を扞つて 君と飲む

李白

看朱成碧顏始紅 朱を看着碧と成れば 顏始めて紅なり

胡姬貌如花 胡姬の貌 花の如し

当壚笑春風 壚に當つて 春風に笑う

笑春風 春風に笑ひ

舞羅衣 羅衣を舞う

君今不醉將安歸 君今醉わずして 將に安にか帰らんとする

長安はまた去り行く人と別れるところでもある。行く人が

辺境であればあるほど別れはつらい。まず北へ行く人を送る

高適の詩

送劉評事充朔方判官賦得征馬嘶 高適

征馬向辺州 征馬 辺州に向い

蕭蕭嘶不休 蕭蕭として嘶いて休まず

思深応帯別 思いの深きは別れを帯びたるなるべし

声断為兼秋 声の断ゆるは秋を兼ねるが為なり

岐路風將遠 岐路 風と將に遠く

関山月共愁 関山 月と共に愁う

贈君從此去 君に贈る 此れ従り去らば

何日大刀頭 何れの日か 大刀頭

朔方はオールドス、広大無辺の北方の砂漠の地であり、異民

族の北方からの侵入を防がねばならない。

そして北方といえ、誰しも思ひ出す漢の王昭君の悲劇が

ある。漢と匈奴との宿命的対立の一コマである。

王昭君

李白

昭君 玉鞍を払ひ

上馬啼紅頰 馬に上つて 紅頰を啼く

今日漢宮人 今日 漢宮の人

明朝胡地妾 明朝は 胡地の妾

東へ帰る友人も送らねばならない。王維は親しんだ友人、

日本の阿倍仲麻呂に今生の別れを告げる。

送秘書晁監還日本國

王維

積水不可極 積水 極む可からず

安知滄海東 安んぞ滄海の東を知らんや

九州何処遠 九州 何れの処か遠き

万里若乘空 万里 空に乗ずるが若し

向国惟看日 国に向つては惟だ日を見

帰帆但信風 帰帆は但だ風に信すのみ

鰲身映天黑 鰲身 天に映じて黒く

魚眼射波紅 魚眼 波を射て紅し

郷樹扶桑外 郷樹は扶桑の外

主人孤島中 主人は孤島の中

別離方異域 別離 方に域を異にせば

音信若為通 音信 若為ぞ通ぜん

東海はるかに去った友人とは「音信、若為ぞ通ぜん」、も

はや音信を交わすこともできない。

この友人が、帰途、難破したときいて李白はなげいて一首

詠んだ。

哭晁卿衡

李白

日本晁卿辞帝都

日本の晁卿ちやうけい 帝都を辞し

征帆一片遶蓬壺

征帆一片 蓬壺を遶るめぐ

明月不帰沈碧海

明月帰らず 碧海に沈み

白雲秋色滿蒼梧

白雲秋色 蒼梧に滿つ

白雲秋色、蒼梧に滿つ、青海原に消えてしまった寂寥の感

がひしひしと迫るものである。

南方へはまた左遷される人も送らなければならない。

送鄭侍御謫閩中

高適

謫去君無恨

謫去 君恨むこと無し

閩中我旧過

閩中 我旧と過ぎたり

大都秋雁少

大都 秋雁少なく

只是夜猿多

只だ是れ夜猿多し

東路雲山合

東路 雲山合するも

南天瘴癘和

南天 瘴癘 和く

自当逢雨露

自ずから当に雨露に逢うべし

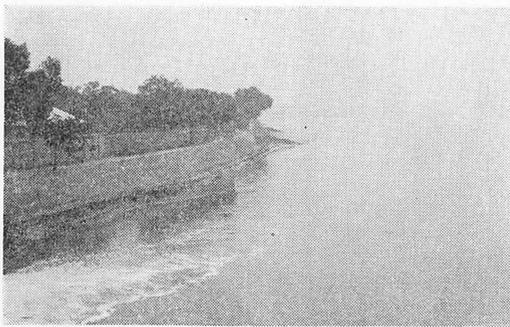
行矣慎風波

行け矣 風波を慎め

行矣とは、さあ勇気を出して行きなさい、体に気をつけて。またよいこともあるだろう。

長安城の西壁の北に開かれている門は「開遠門」という。

西域へ行く人はまずこの門から長安を後にする。去り行く人を送る家族や友人は、なお名残を惜しんで開遠門を出て、渭水のはとりまでやってくる。ここで人々は柳の枝を手折って



渭橋より渭水北岸を望む

最後の別離の情をのべるのである。河西へ出る北廻りルートはここで渭水を北に渡る。北側にわたると秦の都のあった咸陽である。渭水にかけられた橋を「渭橋」または「咸陽橋」といい、対岸は「咸陽城」とも「渭城」ともいう。

送元二使安西詩

王維

渭城朝雨浥輕塵

渭城の朝雨 輕塵を浥し

客舍青青柳色新

客舍 青青として柳色新たなり

勸君更尽一杯酒

君に勸む 更に尽くせ一杯の酒

西出陽關無故人

西のかた陽關を出ずれば故人無からん

一般に送別の詩としてひろく知られている。元氏の二男が安西都護府へ出向くのを送ったもので、「渭城の曲」とも「陽関の曲」ともいい、終句を繰り返し歌うので、「陽関三疊」といわれている。陽関は玉門関の南の関所で玉門関とともに、西域への開口部である。故人は友人のこと。安西都護府は新疆の天山の南麓、トルファンの高昌城に最

初置かれ(六三九)、やがてさらに西の龜茲(現・庫車東方)に移された(六五七)。王維の時代は龜茲にあり、砂漠または砂漠を越えた先のまさに「天外の地」であつた。二度とあえぬかも知れない。友人を送るのに、真情があふれずにはいられない。渭城の美しい風景を前半でのべ、それが後半のどうにも別れ難い別離の情をきわだたせるのである。

渭橋という別れの場所は、友人を送るだけの所ではなく、軍隊もここで家族と悲痛な別れをしなければならぬ。杜甫の「兵車行」は次の如くいう。

兵車行

杜甫

車轆轤 馬蕭蕭  
行人弓箭各在腰  
耶娘妻子走相送  
塵埃不見咸陽橋  
牽衣頓足攔道哭  
哭聲直上干雲霄  
道旁過者問行人  
行人但云点行頻  
或從十五北防河  
便至四十西營田  
去時里正與裏頭  
歸來頭白還戍邊  
辺庭流血成海水

車は轆轤 馬は蕭蕭  
行人の弓箭は各々腰に在り  
耶娘 妻子 走りて相い送り  
塵埃に見えず 咸陽の橋  
衣を牽き足を頓し道を攔りて哭し  
哭聲は直ぐに上りに雲霄を干す  
道旁に過ぐる者の行人に問えば  
行人は但だ云う「点行頻なり」と  
或は十五より北のかた河に防ぎ  
便ち四十に至るも西のかた田を営む  
去きし時には里正の与に頭を裏みくれしに  
帰りに来たりて頭白きに還お辺を成る  
辺庭の流血は海水を成せど

武皇開辺意未已 武皇 辺を開く 意は未だ已まず  
君不聞漢家山東二百州 君聞かずや 漢家山東の二百州  
千村万落生荆杞 千村万落 荆杞を生ずるを  
縦有健婦把鋤犁 縦え健婦の鋤犁を把る有るも  
禾生隴畝無西東 禾は隴畝に生じて西東無し  
沉復秦兵耐苦戰 沉んや復た秦兵は苦戦に耐うるとて  
被駭不異犬与雞 駭らるることは犬と鶏とに異ならず  
長者雖有問 一長者 問う有りとい雖も  
役夫敢伸恨 役夫 敢て恨みを伸べんや  
且如今年冬 且つ今年の冬の如きは  
未休関西卒 未だ関西の卒を休めざるに  
県官急索租 県官 急に租を索むるも  
租税従何出 租税は何こより出でん  
信知生男惡 信に知りぬ 男を生むは悪しく  
反是生女好 反つて是れ女を生むは好しと  
生女猶得嫁比鄰 女を生めば猶お比隣に嫁するを得るも  
生男埋没隨百草 男を生めば埋没して百草に隨う  
君不見青海頭 君見ずや 青海の頭  
古來白骨無人收 古來 白骨 人の收むる無く  
新鬼煩冤旧鬼哭 新鬼は煩冤し旧鬼は哭し  
天陰雨湿声啾啾 天陰り雨湿るとき声の啾啾たるを  
右の一節「耶娘(父母)妻子 走りて相い送り、塵埃に見えず 咸陽の橋、衣を牽き足を頓し道を攔りて哭し、哭聲直ぐ

に上りて雲霄を干す、道傍に過ぐる者の行人に問えば、行人は但だ云う 点行（徴発）頻りなり と、……君見ずや 青海の頭、古来 白骨 人の収むるなく、新鬼は煩冤し旧鬼は哭し、天陰り雨湿るとき声の啾啾たるを」は鬼気迫り、詩は自身の緊張に堪えざる如くである。苛酷な西域の政治的情況と自然は、西へ去った兵士をふたたび故郷へは戻してくれないであろう。それでも彼等は行かなければならない。西域確保は中国の安全確保のための宿命的な絶対的命令であったためである。北方諸民族の中国侵入と中国とはもう一千年以上の緊張を作り出している。こうした中で個々の人々は人間の営みを続けねばならない。杜甫の詩は、その逃れようのない個人の運命にひたと眼を向けているがために、鬼気迫るものがあるといふべきであろう。李白にも「古風」と称する中に、こうした詩がある。

残された妻は、遠く西のかなたに去っていった夫の留守を守る。

子夜呉歌

長安一片月 長安 一片の月

万戸擣衣声 万戸 衣を擣つ声

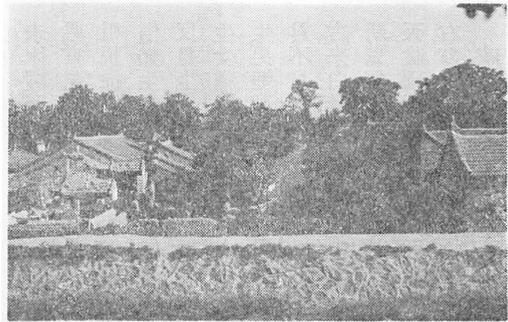
秋風吹不尽 秋風 吹き尽くさず

総は玉関情 総べて是れ 玉関の情

何日平胡虜 何れの日か胡虜を平らげ

良人罷遠征 良人 遠征を罷めん

李白



西安の民家

多分もはや帰れないかも知れぬと思いながらも、玉門関の彼方の夫を思わずにはいられない。月も、きぬたの音も、風も、すべてが玉門にいるあなたのことにつながらずにはいない。

さて、人々の思いを残して西へ旅立つルートであるが、一つは渭水を北に渡る。これは渭橋を渡って渭城を通過し、涇河を西北にとって、六盤山

・固原を通り、靖遠県の紅山峽というところで黄河を西に渡り、河西回廊に入る。そして涼州（現・武威）に出ることになる。一方で河西に出る南ルートは、長安から西行して渭水南岸を遡り、天水・隴西・臨洮を経て、ここから西北にとって蘭州に出、黄河を渡り河西に入って武威にでるコースと、臨洮から永靖県の炳靈寺石窟直下で黄河を渡り、青海省に入り、大通河ぞいに北行し、祁連山脈中の「焉支山」（燕支山）附近（扁渡口、『隋書』に大斗拔谷）を越えて河西回廊に下り、張掖に至る。炳靈寺石窟は一九五一年発見、一九五三年世界に紹



六 盤 山 附 近

介されたもの。創設は天水の麦積山石窟と略同じであり、西秦・建康元年（四二〇）の題記が発見されている。約七百の石仏、八十の塑像、二七メートルの摩崖仏を含む。特徴は麦積山などよりもつと外来（インド）様式が濃い。北のルートの六盤山は、ジンギス汗が死んだ（一二二七）所として知られるが、近年の中国革命にゆかりの深い所でもある。

今、毛沢東の詩を二つあげてみよう。  
清平楽（第十九首） 六盤山

毛 沢東

天高雲淡し  
望断南飛雁  
不到長城非好漢  
屈指行程二万  
六盤山上高峯  
紅旗漫捲西風  
今日長纓在手

天高く雲淡し  
望断す 南に飛ぶ雁を  
長城に到らずんば 好漢に非ず  
指を屈らば 行程二万  
六盤山上 高き峯  
紅旗 漫りに西風に捲かる  
今日 長纓は手に在り

何時縛住蒼竜

何れの時か 蒼竜を縛住せん

沁園春（第二十首） 雪 毛 沢東

北国風光  
千里冰封  
万里雪飄  
望 長城内外  
惟余莽莽  
大河上下  
頓失滔滔  
山舞銀蛇  
原馳蠟象  
欲与天公試比高  
須晴日  
看 紅装素裹  
分外妖嬈  
江山如此多嬌  
引無數英雄競折腰  
惜 秦皇漢武  
略輸文采  
唐宗宋祖

北国の風光  
千里氷 封じ  
万里雪 飄える  
長城内外を  
望めば  
惟だ 莽莽たるを余すのみ  
大河の上下  
頓ち 滔滔たるを失う  
山に 銀蛇 舞い  
原に 蠟象 馳け  
天公と高きを比ぶるを試みんと欲す  
晴れし日を須ち  
紅装 素裹を  
看れば  
分外 妖嬈たり  
江山 此の如く嬌多し  
無數の英雄を引て競いて腰を折らしむ  
惜しむらくは  
秦皇 漢武  
略ば文采に輸け  
唐宗 宋祖

稍遜風騷

稍 風騷に遜るおと

一代天驕

一代の天驕

成吉思汗

成吉思汗

只識彎弓大雕

只弓を彎まいて 大雕を射るを識るのみ

俱往矣

俱に 往けり

数

風流の人物を

風流人物

数えんには

還看今朝

還た 今朝を看よ

中国史上最大の革命を指導した、英雄・豪傑の気概があふ

れている。このあたりから北は黄河の大彎曲部の内側であつ

て、はるかオルドスに或は黄河の最北部から北に大きな砂漠

がひろがる。六盤山附近の固原という所は、昔、軍事上の要

衝、蕭関があつた。

王維は、開元二十五年(七三七)に節度判官として河西の涼州(武威)へ行く際にこの蕭関を通つてゐる。

使至塞上

王維

衛命辞天闕 命を衛まもみて天闕を辞し

單車欲問辺 單車もて辺を問わんと欲す

征蓬出漢塞 征蓬 漢塞を出で

歸雁入胡天 歸雁 胡天に入る

大漠孤煙直 大漠 孤煙直に

長河落日圓 長河 落日 円まかなり

蕭関逢候騎 蕭関 候騎に逢えば

都護在燕然 都護 燕然にありと

ここまできた王維はオルドスにつながる異様な光景を眼の

あたりにした。都護が燕然にありというのは、黄河の最も奥

深い、北のさいはての安北都護府のことで、蕭関からははる

かに遠い。自分はしかし、西へ行く。最後の二句はこの地の

大きなひろがりをものべている。

河西回廊への南廻りルートは、長安から渭水南岸にそつて

西へ進むこと、前にのべたが、やがて天水(秦州)にさしかか

る。ここでも、西へ行った人を憶い涙を流している婦人がい

る。 烏夜啼

李白

黃雲城辺烏欲棲

黃雲城辺 烏棲すまんと欲し

歸飛啞啞枝上啼

歸り飛んで 啞あ啞として枝上に啼く

機中織錦秦川女

機中 錦を織る 秦川の女

碧紗如煙隔窓語

碧紗 煙の如く 窓を隔てて語る

停梭悵然憶遠人

梭を停とめて 悵然 遠人を憶い

獨宿空房淚如雨

獨り空房に宿して 涙 雨の如し

からすでも、自分の棲家に帰つてくるといふのに、憶う人

は帰つてこない。仕事も手につかず、空ろな気持で日々を過

している状態が最後の二句にこめられて、悲しみの色は一段

と人に迫らずにはいない。

天水の西は隴西である。天宝八年(七四九)に、辺塞詩人・岑参は、安西節度使・高仙芝の大軍団の幕下に入り西域へ出

発したが、渭州つまり隴西にさしかかった。長安も、もう遠くなくなった。しかしまだ河西回廊にも入っていない。前途は気が遠くなるほど遠いのである。出発してまだ間がないけれども、不安はかくせない。

見渭水思秦川

岑参

渭水東流去 渭水 東流し去る

何時到雍州 何れの時か雍州に到る

憑添兩行淚 憑よつて兩行の涙を添え

寄向故園流 寄せて故園に向つて流さん

渭水は東流して長安にたどりつく。この渭水に、両眼から流れる二すじの涙を添えて、なつかしい家へ送りたい。

乾元元年（七五八）、杜甫は飢饉を避け、官をすてて妻子とともに天水へ逃れてきた。安祿山の乱が起つて三年、天下大



紫髯緑眼の胡人  
(唐三彩)

乱の中である。天水へ逃れたのだが、ここは蜀や青海・チベットへの道であり、もう前線の色が濃い。杜甫はいらだつてであった。

秦州雜詩

杜甫

鳳林戈未息 鳳林 戈ほこ 未だ息まず

魚海路常難 魚海 路みち 常に難し

候火雲峰峻 候火 雲峰うんぽう 峻たけ しく

懸軍幕井乾 懸軍 幕井まくせい 乾く

風連西極動 風は西極に連なりて動き

月過北庭寒 月は北庭を過ぎて寒し

故老思飛將 故老 飛將を思う

何時議築壇 何時いつの時か築壇を議せん

河西回廊から、或は蜀や青海・チベットからの圧力はひし

ひしと迫る。近くの鳳林関での戦闘、これも苦しいが、西のかたはるかな北庭が安定しなくてはならない。どうすればよいのだろうか。乱の終るのは何時のことになるのだろうか。彼

はいらだつており、神経もたかぶっている。  
鳳林から西は黄河越えである(炳靈寺ルート)。

西方への路は、しよせんは黄河を越えて河西回廊に踏み込まねばならない。南ルートは山岳地帯をこえて青海に入り、

祁連山脈越えて河西へ出ることは前にのべた通りである。河西地区に入れば、もう中原地方とは違う異国情緒が急に濃厚

となるのである。岑参は高仙芝の軍団に従軍する前の年、天

宝七年（七四八）に、河西の武威方面と青海地方に巡視におもむいたところの顔真卿を送ったが、その際、この荒涼たる地方を詩に託して、胡笳（胡人の芦笛）の歌をつくり、別れの意をのべている。当時の人の河西のイメージがよくあらわれている。

笳歌送顔真卿使赴河隴

岑参

君不聞胡笳声最悲 君聞かずや 胡笳の声最も悲しきを  
紫髯緑眼胡人吹 紫髯、緑眼 胡人吹く  
吹之一曲猶未了 之を吹いて一曲 猶未了らざるに

愁殺樓蘭征戍兒 愁殺す 樓蘭征戍の児  
涼秋八月蕭関道 涼秋八月 蕭関の道

北風吹断天山草 北風吹断す 天山草

崑崙山南月欲斜 崑崙山南 月 斜ならんと欲す

胡人向月吹胡笳 胡人 月に向つて胡笳を吹く

胡笳怨兮将送君 胡笳 怨みて 将に君を送らんとす

秦山遙望隴山雲 秦山 遙かに望む 隴山の雲

辺城夜夜多愁夢 辺城 夜夜 愁夢多し

向月胡笳誰喜聞 月に向つて胡笳誰か聞くを喜ばん

武威は漢の武帝の河西四郡の東の端であるが、唐代は涼州といったのである。この地方に西域から伝来した俗曲に「涼州の歌」というのがあり、玄宗の開元年間に西涼府都督・郭知運によって朝廷に献ぜられたという。その曲に合せて詩人たちはいろいろと歌詞をつけたが、その一つ、王翰の「涼州

詞」はシルクロードの歌として著名である。

涼州詞

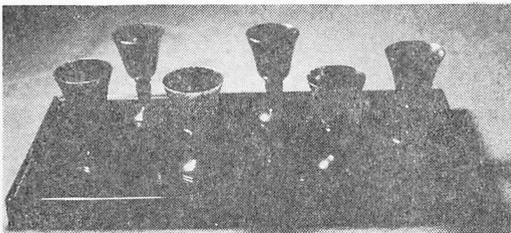
王翰

葡萄美酒夜光杯 葡萄の美酒 夜光の杯  
欲飲琵琶馬上催 飲まんと欲して琵琶 馬上に催がす  
醉臥沙場君莫笑 酔いて沙場に臥す 君笑うこと莫かれ  
古來征戰幾人回 古來征戰 幾人が回る

夜光杯というのは、東方朔撰と称する「海内十州記」に周の穆王の時「西域、夜光の常に満つる杯を献ず」といい、白玉の精だという。遠い西方の異国からきた玉の杯らしいが、

今は祁連山から出る玉を用いて酒泉で作られている。葡萄酒はもちろん西域のもの、それに琵琶、と異国情緒を詠みこんで、豪放に砂漠で酔いつぶれる。青年の情念かと思われる詩であるが、前半の異国情緒と後半特に終句とを対比してみると、刹那に生きた悲痛な響きを持つのは如何ともし難い。

武威から酒泉にかけては南の祁連山脈と北の砂漠にはさまれ、風光はますますさびしくなってくる。このあたりからは祁連山脈中の焉支山が望見できる。焉支山は古く



夜 光 杯

は前漢の霍去病のはなばなしの戦場のあとであり、また隋の煬帝が西域諸国の王を呼びつけて大いにその威光を示したところである。長安から山越えの河西へのルートも、この山の北を越えて河西へ下りてくる。

秋思

李白

燕支黄葉落 燕支 黄葉落つ

妾望自登台 妾は望んで自ら台に登る

海上碧雲断 海上 碧雲 断え

单于秋色来 单于 秋色来る

胡兵沙塞合 胡兵 沙塞に合し

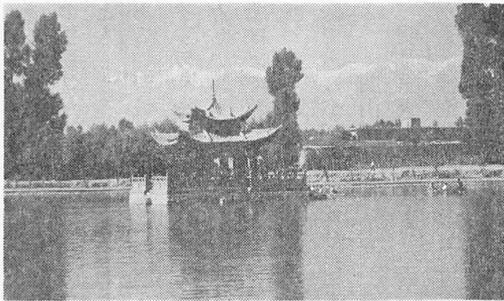
漢使玉關回 漢使 玉關より回る

征客無帰日 征客 帰日無し

空悲蕙草摧 空しく悲しむ 蕙草の摧くるを

ここにも帰らぬ夫を待つて、年老いてゆく妻がいる。燕支は焉支山。海上の海は、祁連山の南側、青海高原にある湖、青海である。蕙草は婦人の容色のたとえ。ここから青い雲がわきおこつて秋の気配がしのびよる頃、胡の兵は砂漠のとりでに集結したらしく、急を告げる漢の使が玉門関からやつてくる。この分だと出征した人は当分帰れぬだろう。帰らぬ人待つて空しく年老いてゆく妻。杜甫の「兵車行」(前出)には数十年帰らぬことをいっているが、「空悲蕙草摧」は決して誇張ではなく、ここには無限の恨みがこめられている。

安西節度使・高仙芝の軍団は天宝八年(七四九)の冬、やつ



酒泉公園よりみた祁連山脈

と酒泉に到着した。河西も中程であり、あたりの風景はますます荒涼としてくるのである。酒泉につくと、太守が宴席を設けて一行を慰めてくれた。岑参は

酒泉太守席上醉後作

岑参

酒泉太守能劍舞 酒泉の太守 能く劍舞す

高堂置酒夜擊鼓 高堂置酒して 夜 鼓を撃つ

胡笳一曲断人腸 胡笳一曲 人の腸を断つ

坐客相看淚如雨 坐客相い見て 涙 雨の如し

劍舞と戰鼓を交じえた華やかな宴会であった。そのさ中に

ふと聞えてきた胡笳の物悲しい音色。はっと我にかえり互いに顔を見合せて涙がこみあげてくる。前半の華やかさが、突如暗転して後半の断腸の想いとなる、その落差の大きさが悲痛の感傷をもちあげてあますところがない。何とも凄まじい辺境の夜ではある。

酒泉をさらに西へ進ると、安西(瓜州)を経て敦煌郡に入ってくる。砂漠には点々と烽火台が連なり、それは

敦煌城を過ぎて玉門関に到る。敦煌は武帝の河西四郡の西の端の郡であり、文字通り西域へ直接つらなる要衝の地である。ここで西域へ行く人はひと休みして準備をととのえねばならぬ。敦煌県城を西へ砂漠をこえて百キロ弱進むと玉門関である。玉門関は中原の文明のつきるところ、西域への開口部であった。

従軍行一

王昌齡

烽火城西百尺楼

烽火城西 百尺の楼

黄昏独坐海風秋

黄昏に独り坐す 海風の秋

更吹羌笛関山月

更に羌笛を吹く 関山の月

無那金闐万里愁

那んともする無し 金闐万里の愁い

「関山月」とは征戍・別離の哀愁をうたう笛の曲名である。

詩は終始淋しくたよりなげであり、万里の彼方で妻が自分のことを思っているであろうが、どうすることもできない。

従軍行二

王昌齡

青海長雲暗雪山

青海の長雲 雪山暗し

孤城遙望玉門関

孤城 遙かに望む 玉門関

黄沙百戰穿金甲

黄沙百戰 金甲を穿つも

不破樓蘭終不還

樓蘭を破らずんば 終に還らじ

玉門関から、まっすぐ西が樓蘭である。樓蘭を抑えることは西域支配と河西防衛を確実なものとする。これは後漢の班勇が説くところである。むろん唐代には樓蘭国はない。ここは漢代樓蘭を借りて西域を代表せしめていることもちろんで

ある。こうして樓蘭を攻めとるためには、玉門関と敦煌はその根拠地なのである。敦煌は砂漠の中のオアシスで、祁連山とももう遠くなつてきており、県城周辺は黄塵の舞う砂漠である。西域のオアシス諸国まではまだ遠いが、すぐに新疆でタクラマカン砂漠に連なる。この詩は珍しく勇壮である。若々しいエネルギーがあふれる感である。以上の二首の詩、場所はよくわからぬが、敦煌周辺、河西の西の地方を考えればぴったりとくると思われる。次の李白の詩も、彼のこれは想像であるが、この附近の風光にあててみて觀賞できる。

関山月

李白

明月出天山

明月 天山より出ず

蒼茫雲海間

蒼茫たり 雲海の間

長風幾万里

長風 幾万里

吹度玉門関

吹き渡る 玉門関

漢下白登道

漢は下る 白登の道

胡窺青海湾

胡は窺う 青海の湾

由来征戰地

由来 征戰の地

不見有人還

見ず 人の還るあるを

戍客望边色

戍客 边色を望み

思婦多苦顔

帰るを思いて 苦顔多し

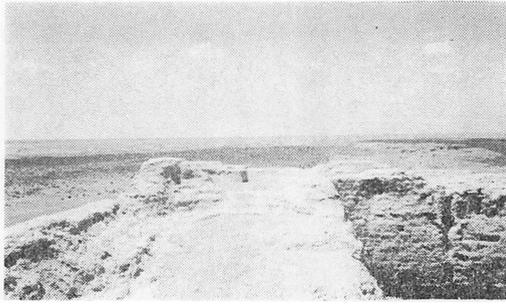
高楼当此夜

高楼 此の夜に当り

歎息未应閑

歎息すること未だ閑ならざるべし

新疆に入ればすぐ天山山脈がそびえており、天山の南北の



玉門関より西方を望む

麓にはオアシスの国々がある。国々といつても、村々があるといつてよく、主として異民族の居住する地である。これらのオアシスを結んで天山北路と天山南路が西へ通じる。唐は天山北路の先には北庭都護府を、南路の先には安西都護府を置いた。長安からみればまさに天外の地の根拠地であった。

敦煌附近では、月がはるか西の天山の方に出てくる。そして西方から風が吹いて玉門関に及んでくる。しかも、このあたりは異民族との長い争奪の地であり、兵士たちも生還することとは稀である。「漢は下る白登の道、胡は窺う青海の湾」と

いうのは争奪の地であることとをいう。白登は白登山で、匈奴のために漢の高祖が一敗地にまみれたところ、これは河西ではなく河東であり、今の大同附近である。漢兵が東に匈奴を追えば、そのすきに胡（やはり匈奴）は青海、つまりは西から河西を攻撃しようとする深刻な情況をいう。このような所で古来人は生還を期することはむつかしい。戦いだけでなく砂漠の行軍は水・

食糧で困難を極め、ばたばたと倒れて行くのである。漢の李広利の最初の遠征で数万の軍が数千に減じたのは、この捕給困難のためであった。西域の詩に、西へ行く人が還らぬであろう、と悲しむのは、このような実際の情況があつたのである。

さて、敦煌城を西へ砂漠を進むと玉門関である。

涼州詞

王之涣

黄河遠上白雲間 黄河 遠く上る 白雲の間

一片孤城万仞山 一片の孤城 万仞の山

羌笛何須怨楊柳 羌笛 何ぞ須いん 楊柳を怨むを

春光不度玉門関 春光度らず 玉門関

羌は吐蕃、楊柳は「折楊柳」という別れの曲、春光は中原の文化の光か。玉門関の向うは、春の光もあたらず、従って楊柳も芽ぶくことはないのに、羌の笛で「折楊柳」を吹いて何になろうか。ここは「塞外の孤城」なのである。ここから西を望むと、砂漠がはるかにタクラマカンに続き、その先にかつての楼蘭がある。

天宝八年（七四九）の暮、高仙之の軍団は玉門関にたどりついた。ちょうど大晦日の前日である。

玉関寄長安李主簿

岑参

東去長安万里余 東のかた長安を去る万里余

故人那惜一行書 故人那んぞ惜しむ 一行の書

玉関西望腸堪断 玉関西望すれば 腸断つに堪えたり

況復明朝是歲除 況んや復た 明朝是れ歲除なるおや

歲除は大晦日、西望は西から東を望む。ふり返つて東のかたをみれば、腸もちぎれんばかりの悲しきにおそわれるのである。長安からの便りもなかなかとどかない。たった一行でよいから手紙が欲しい。

軍団は、玉門関をさらに西へ越えた。玉門から西は情況はもつと凄まじい。ここを出れば、生きて帰ることはほんとうにあきらめねばならないであろう。玉門関の西に「苜蓿烽」という烽火台があった。苜蓿は馬ごやしといわれる。一寸したオアシスがあったのだろう。この苜蓿烽についたのは、明るる天宝九年（八五〇）の立春の日であった。

苜蓿烽寄家人

岑参

苜蓿烽辺逢立春 苜蓿烽辺 立春に逢う

胡蘆河上淚沾巾 胡蘆河上 淚巾を沾おす

關中只是空相憶 關中 只是れ空しく相い想わんも

不見沙場愁殺人 沙場 人を愁殺するを見ず

胡蘆河は川であるが、むろん十分な水量があるわけではない。砂漠にかこまれたすぐにも涸れそうな糸のような川であったろう。大抵は尻なし川であり、周辺わずかに苜蓿があったのであろうか。玄奘も玉門からここを通っている。望郷の涙は絶えることはない。妻よ、自分のことを想ってくれているだろうが、こんなひどい所であるとは想像もつかぬであろう。

李白は、さらに西の情況を想像して詠んでいる。

塞下曲

李白

塞虜乘秋下 塞虜 秋に乗じて下り

天兵出漢家 天兵 漢家を出づ

將軍分虎竹 將軍は虎竹を分ち

戰士臥竜沙 戰士は竜沙に臥す

辺月隨弓影 辺月 弓影に隨い

胡霜搥劍花 胡霜 劍花を搥う

玉關殊未入 玉關 殊に未だ入らず

少婦莫長嗟 少婦 長嗟すること莫れ

虎竹は、銅虎符・竹使符などという漢代の割符である。竜

沙は「白竜堆」と呼ばれる砂漠中の特徴のある所で、ロブノールの東方にある、塩分のふきでた起伏の多い凄惨な場所である。終りの二句は、このようなことから玉門までとても帰りつけそうにない。若い妻よ、なげいてもせんないことだという意である。はかないなくさめがここにある。

こうして軍団はタクラマカンに出てくるが、岑参は

積中作

岑参

走馬西來欲到天 馬を走らせ西來 天に到らんと欲す

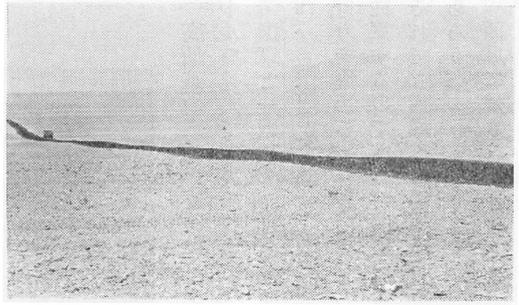
辭家見月兩回圓 家を辭して月の兩回圓かなるを見る

今夜不知何処宿 今夜は知らず 何れの処にか宿らん

平沙万里絶人煙 平沙万里 人煙を絶つ

積は戈壁砂漠のこと。西へ西へと馬を走らせてきたが、天

にでも着くというのだろうか。長安をでて二カ月行軍してき



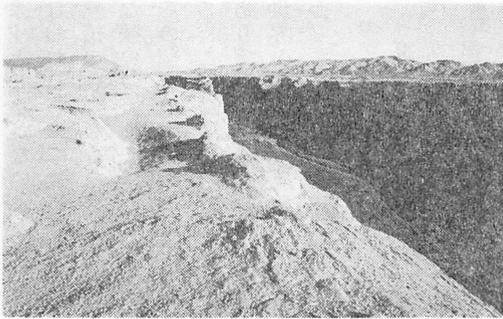
トルファンのゴビ砂漠

入った軍隊、その宿営地の井戸も乾けば、恐怖以外にはない。天宝九年（七五〇）に高仙芝の軍団はトルファン（吐魯番）に着いた。岑参は翌年の春まで滞在するが、着いた年の九月にトルファンの交河城（「またの河にはさまれた台地上にある」）で、さらに西方の安西都護府から飛ぶようにして長安へ帰る友人を見送り、望郷の思いを詩に託している。

送人還京

岑参  
 匹馬西從天外歸 匹馬 西のかた天外よ從り歸る  
 揚鞭只共鳥爭飛 鞭を揚げてた只だ鳥と飛ぶを争う

た、というのであるが、強行軍といわなければならぬ。犠牲者もたであらう。今夜はどこで休めるだろうか、というのには単なる放浪ではない。軍を休めるに足る水が必要なのである。水がなければ恐怖である。「平沙万里 人煙を絶つ」の一句と合わせてこの詩は不安感に満ち満ちている。杜甫の前出の「秦州雜詩」の中にも「懸軍幕井乾く」とあったが、懸軍すなわち遠く敵中深く



交河と交河故城址

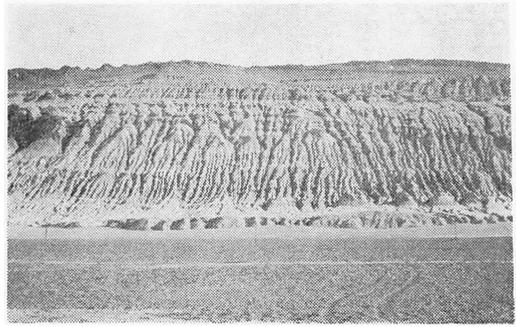
これは翌天宝十年（七五一）に高仙芝といったんわかれて涼州（武威）にもどった岑参が、安西都護府へ赴く友人を送った詩である。火山、すなわちトルファンの火焰山は、赤色のからからの山肌、刻みこまれた無数のひだ、その異様さに初めて見るものは誰しも息を呑む思いである。西域の凄まじい風光の一つである。岑参にも強烈な印象であつ

送君九月交河北 君を送る 九月 交河の北  
 雪裏題詩淚滿衣 雪裏 詩を題すれば 涙 衣に満つ  
 また東から西へ行く人も送らなければならない。

送劉判官赴磧西

岑参

火山五月行人少 火山五月 行人まれ少なり  
 看君馬去疾如鳥 看る 君が馬去つて疾きこと鳥の如くなるを  
 都護行營太白西 都護行營 太白の西  
 角声一動胡天曉 角声 一たび動いて胡天曉く



### 山 焰 火

た。人のほとんど通らぬ  
真夏の火焰山のふもと、  
まさに灼熱のゴビ灘ゴビ（磧  
漠）を、西へと急ぐ友人  
の姿が眼に浮かび、その  
身の上を案じないではい  
られない。しかも、安西  
都護府の行営は、西の空  
に輝く太白（金星）よりも  
もつと西、はるかな龜茲  
にある。そこでは、胡人  
の吹く角笛で夜がある。天  
外の地でなくて何であ  
ろう。

高仙芝の軍は、この年、タクラマカン<sup>タクラマカン</sup>を西へ横切り、パミールを越えて中央アジア、タラス河で大食、つまりサラセン帝国軍と一戦し、敗れて帰還した。唐朝は天寶十三年（七五四）、封常清を安西・北庭両都護に任命し、タラス河以東の守りを固める。岑参はまたしても封常清の幕下となって西に従軍するのである。西域で多くの悲しみにあつた彼であるが、それでも西域への情熱は彼を引きつけずにはいなかったであらう。

西域に残されたさまざまの詩は、人々の心情を写しとって

余すところがないようである。千年以上も前の人間の心が今なおわれわれに強い印象を与えるのは、これらの詩が、人間の感情のいつわらぬ核心をつかんでいたからに相違ない。巨大な歴史の流れに、しよせんは埋没してしまふ個々の人間だが、その個々の人間がまた歴史を創造してきたし、今もそうである。これは歴史なるものの、或は人間の創る世界の奥深さであり深淵である。西域でのさまざまの詩は、こうした人間の世界の深淵の一端をのぞかせているといつては過言であらうか。

#### 参考

- 高木正一『唐詩選』上・下（朝日新聞社刊、新訂中国古典選所収）
- 武部利男『李白』上・下（岩波書店刊、中国詩人選集所収）
- 都留春雄『王維』（岩波同上）
- 黒川洋一『杜甫』上・下（岩波同上）
- 高木正一『白居易』上・下（岩波同上）
- 武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』（文芸春秋刊）